川南町文化財調査報告　8

平成１６年度　県営ふるさと農道緊急整備事業
切原地区（地蔵谷遺跡）
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００５．３
宮崎県児湯郡川南町教育委員会

目　　次

第１章　はじめに
１．はじめに・・・

第1章　はじめに

1．はじめに

川南町は、宮崎県のほぼ中央の海岸線に位置し、面積は90.26平方キロメートルである。本町は、概ね名貫川以南から小丸川左岸の台地の縁辺以北を町域とする。

歴史的環境としては、従来より川南古墳群や東平下周溝墓群、把言田遺跡の間仕切り住居に代表されるように、弥生時代から古墳時代にかけての遺跡の集積が著しい地域として知られていた。しかし、近年では、実は縄文時代早期から古い時代の遺跡の集積も著しい地域と知られる。そのような中で、諸開発行為と文化財保護との調整が問題になることもある。

今回の調査は、平成15年度の県営ふるさと農道緊急整備事業切原地区にかかる埋蔵文化財の発掘調査として、地蔵谷遺跡の調査を宮崎県農政水産部児湯農林振興局の委託金を得て行った発掘調査の報告書である。

2．調査の組織（敬称略）

調　査　主　体		
(平成15年度)	川南町教育委員会	
	教　育　長	坂　本　達　也(～平成15年12月)
		佐　藤　賢一郎(平成15年12月～)
	社会教育課長	杉　本　陽　一
	社会教育課長補佐	橋　本　正　夫
	社会教育係長	林　　あや子
庶　務　担　当	社会教育課　主査	大　塚　隆　美
調　査　担　当	主事	岸　本　優　樹
	文化施設係長	島　岡　　武
(平成16年度)	川南町教育委員会	
	教　育　長	佐　藤　賢一郎
	文化振興室長	杉　本　陽　一
	文化振興室長補佐	伊　藤　康　雄
庶　務　担　当	文化振興室　主事	別　宮　　愛
調　査　担　当	係長	島　岡　　武
	主事	岸　本　優　樹
発掘作業員	河野　学・河野カヨ子・黒木敏男・黒木明子・小吉忠博	
	冨山謐範・奈須親雄・藤沢忠正・渕野トヨ子・松田ハナエ	

第２章　調査の記録

１．調査に至る経緯

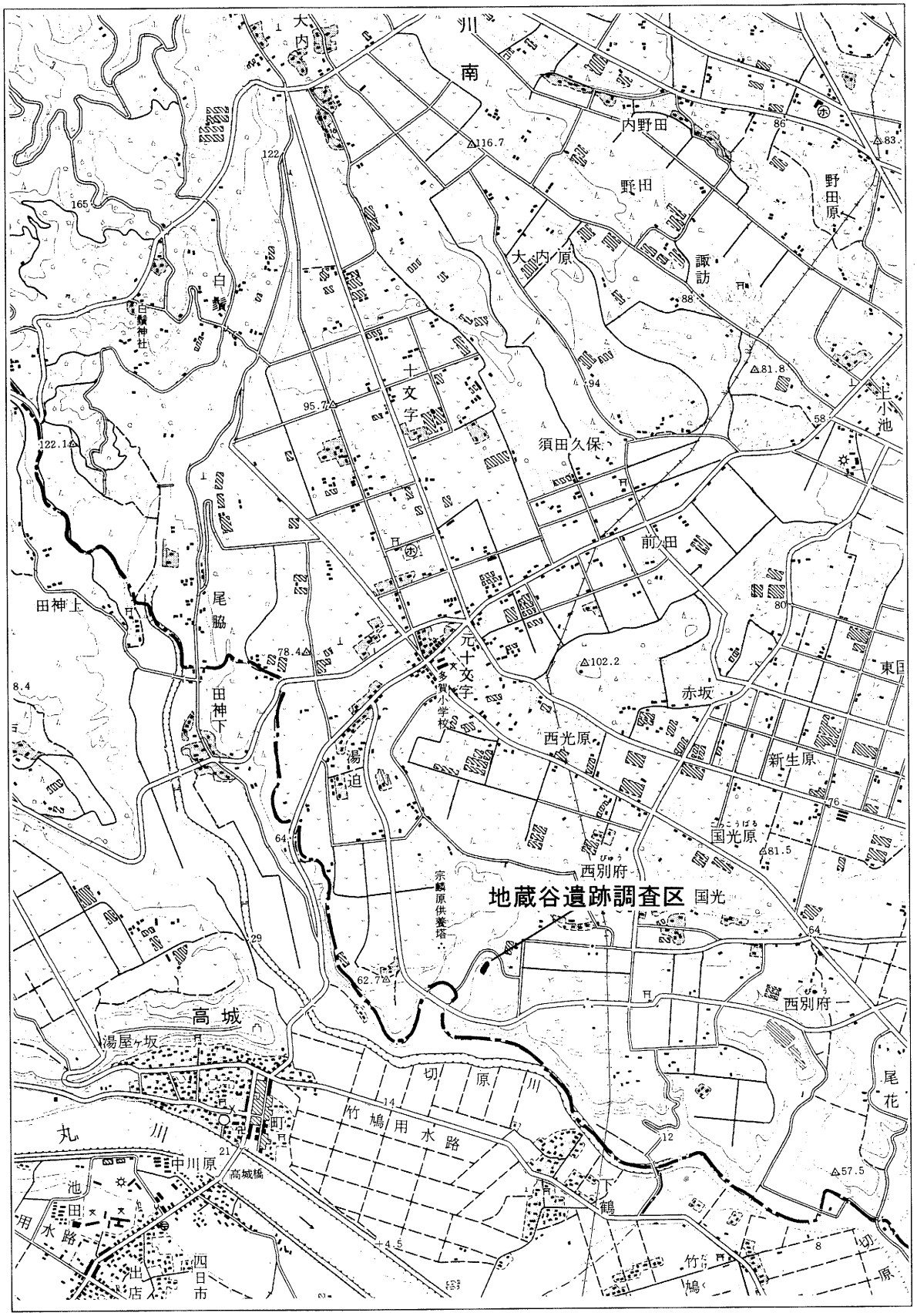
平成15年7月2日付、文書番号6005-694-1で、文化財保護法第57条の３第１項の規定に基づく「県営ふるさと農道緊急整備事業切原工区の工事に伴う埋蔵文化財発掘の通知について」の進達依頼が当教育委員会にあり、宮崎県教育庁文化課埋蔵文化財係による確認調査の結果、遺物の検出が認められたので、同年7月14日付、文書番号108-7-50で埋蔵文化財の発掘調査を行う旨の通知が児湯農林振興局長宛に通知された。

度重なる協議の結果、児湯農林振興局長と川南町教育委員会との間で、埋蔵文化財発掘調査に関する委託契約を結び、平成15年８月18日から平成15年10月31日まで、１回の期間延長を経て調査を行った。なお、調査地の概略は以下のとおりである

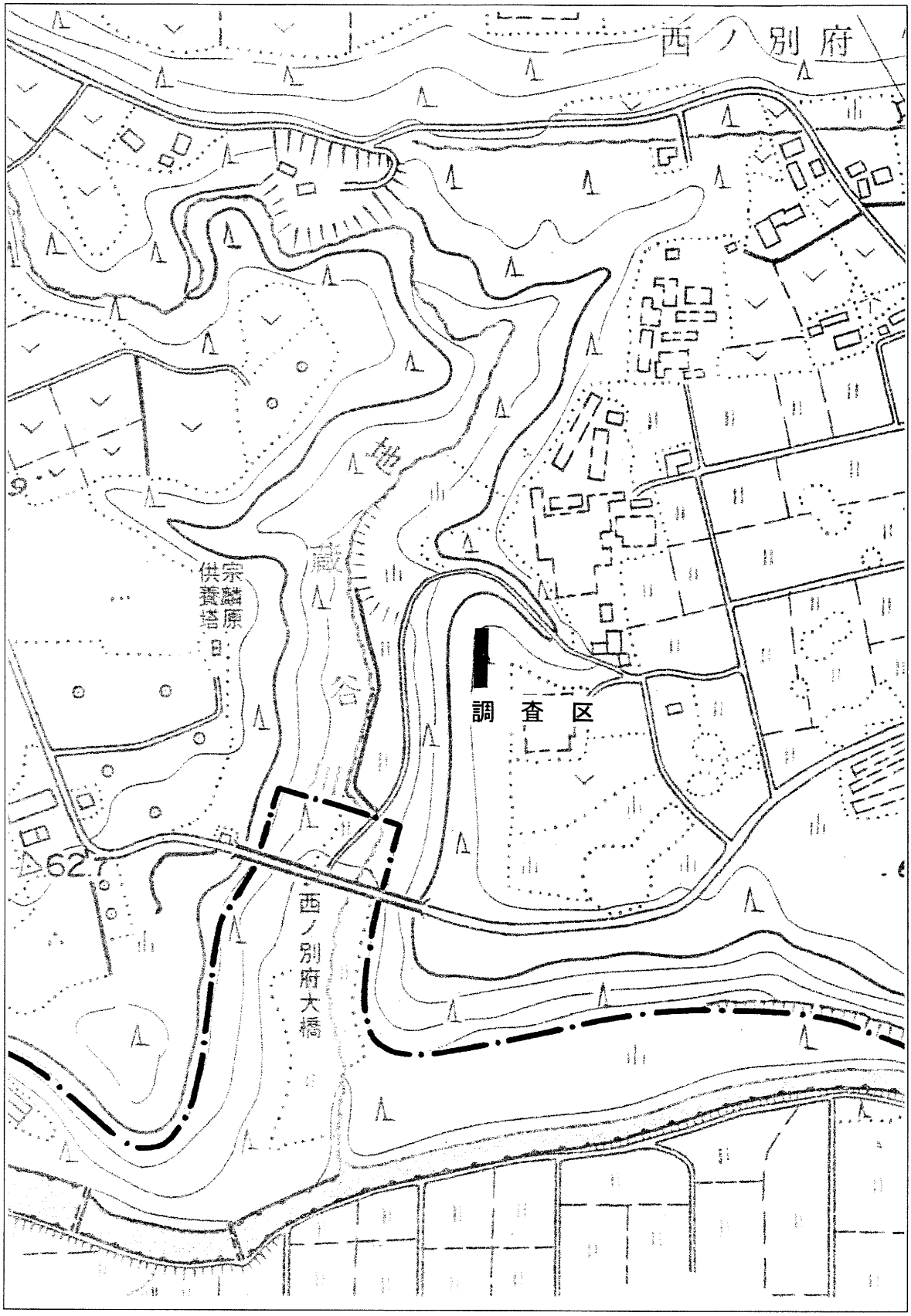
所　在　地	宮崎県児湯郡川南町大字川南字地蔵谷地内 北緯 32度10分11.38秒 東経131度20分05.63秒
調 査 原 因	平成１５年度　県営ふるさと農道緊急整備事業切原地区
調 査 期 間	平成１５年８月１８日～平成１５年１０月３１日
調 査 面 積	実掘面積４００㎡（調査対象面積４００㎡）
調査後の処置	工事実施

２．調査地の位置と環境

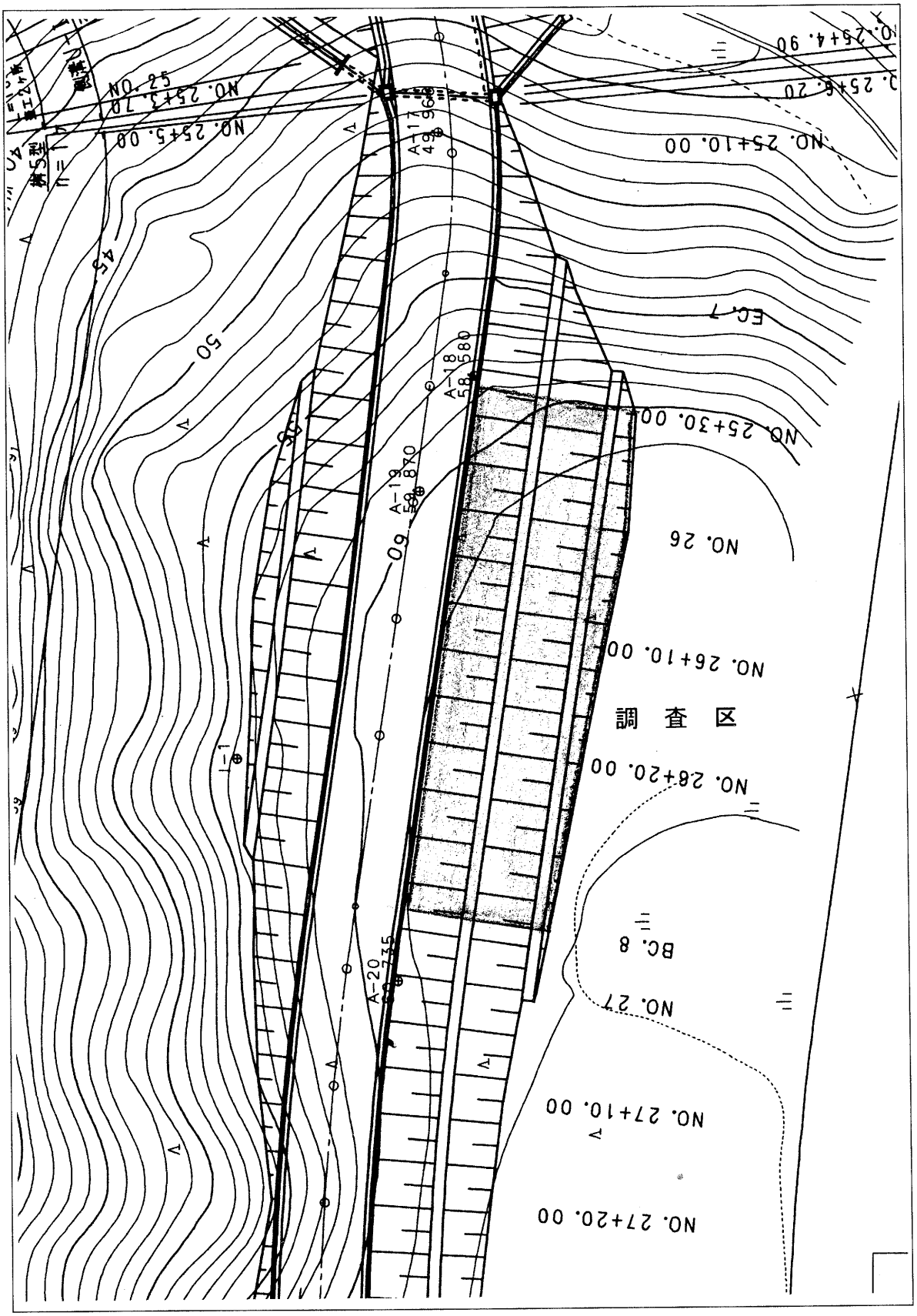
地蔵谷遺跡は、国光原台地が浸食を受けた「地蔵谷」と呼ばれる谷の左岸台地上にあり、標高は約60ｍである、「地蔵谷」の名称の由来は、戦国末期の天正6年11月12日に行われた九州争覇戦の「高城の戦い（通称耳川合戦）」の7年後、両軍戦没者供養のために、時の高城地頭山田信介有信が建立した六地蔵塔に由来するものと考えられる。現在の国指定史跡宗麟原供養塔がその六地蔵塔であるが、地蔵谷遺跡とは谷を挟んでちょうど対岸の台地上に位置する。地蔵谷遺跡のすぐ東には、国指定史跡の川南古墳群が広がる。



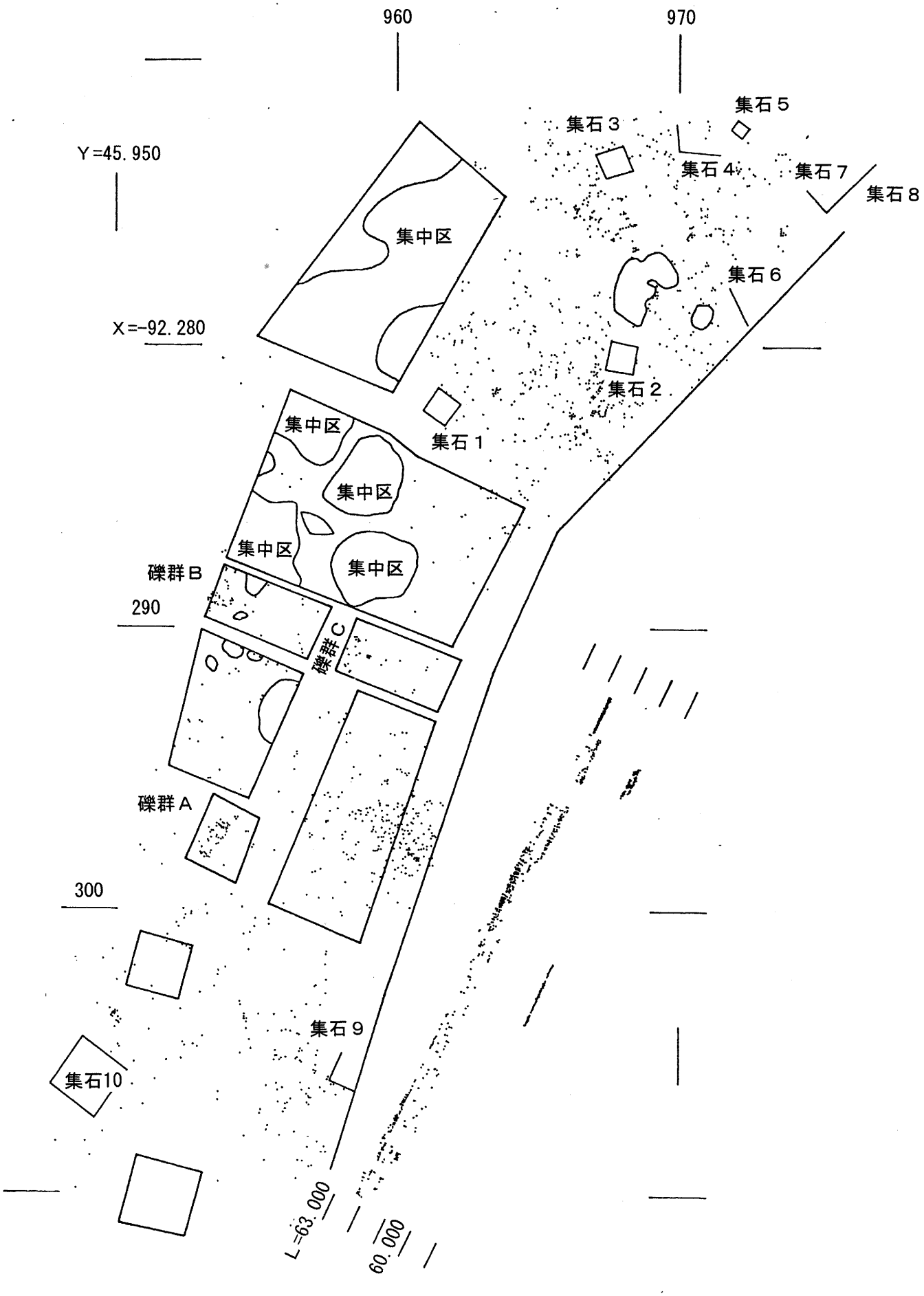
第１図　調査地位置図（１／２５０００）



第２図　調査地位置図（１／５０００）



第３図　調査区配置図Ｓ＝１／５００（工事図に調査地を落としたもの）


960
970
Y=45.950
X=-92.280
290
300
集石１
集石２
集石３
集石４
集石５
集石６
集石７
集石８
集石９
集石10
集中区
集中区
集中区
集中区
集中区
礫群Ａ
礫群Ｂ
礫群Ｃ
L=63.000
60.000

第４図　調査区全図

３．調査の概要

今回の調査は、宮崎県教育庁文化課埋蔵文化財係による確認調査の後、本調査されることになったのであるが、当初の予想では、文化層が縄文時代早期１層の単純遺構等で残存状況はかなり薄く、比較的単純な遺跡と考えられていたが、実際に調査を開始すると、調査地内で遺構に粗密がかなりあり、遺構の集積度が高かった地点では、縄文時代早期の集石遺構が重層的に検出される状況であった。

また、調査終了後には切土により工事が施工されることもあり、一部深堀による確認を行ったが、後期旧石器時代の礫群を検出した。検出面は、もっとも深いもので、ＡＴ直下の黒褐色土下面で検出され、その年代は概ね３万年前になると考えられる。

標準土層は、Ⅰ層－表土、Ⅱ層－アカホヤ、Ⅲ層－黒色腐植土、Ⅳ層－淡褐色ローム層、Ⅴ層－小林軽石を含む黒褐色土（上位白斑ローム）、Ⅵ層－姶良・丹沢火山灰（ＡＴ）、Ⅶ層－黒褐色土（白斑ローム）である。以下は路頭観察で、Ⅶ層、Ⅶ層～Ⅷ層の漸移層、Ⅷ層－淡褐色ローム層、Ⅸ層－霧島大浪イワオコシ（Ｋｒ－Ｉｗ）で、典型的な川南の台地のパターンである。

今回の調査は、縄文早期の遺構が検出される直上まで重機による表土掘削を一気に行い、遺構・遺物の検出を行った。測量は道路座標を基に国土座標系で座標の確認をした。標高は東京湾平均海水面である。遺構実測には平板測量を行い、記録画像は３５ｍｍポジフィルム・デジタルカメラによる写真撮影を行った。集石遺構は単純な構造なものであったので、俯瞰撮影による写真記録に留まった。

４．検出遺構

検出遺構は、縄文時代早期の集石遺構が１０基、旧石器時代の礫群が３基検出されている。集石遺構については図版２～３のとおりである。全て掘底を持たない構造で、単純かつ厚みのない集石であった。時間的な制約などもあり、集石遺構の記録については、写真撮影を行った。

集石遺構１（図版２－１）グリッドの差し渡しは１ｍ×１ｍ。撮影方向は東から。
集石遺構２（図版２－２）グリッドの差し渡しは１ｍ×１ｍ。撮影方向は北から。
集石遺構３（図版２－３）グリッドの差し渡しは１ｍ×１ｍ。撮影方向は北から。
集石遺構４（図版２－４）グリッドの差し渡しは１ｍ×１．５ｍ。撮影方向は北から。
集石遺構５（図版２－５）グリッドの差し渡しは０．５ｍ×０．５ｍ。撮影方向は北から。
集石遺構６（図版２－６）水糸の差し渡しは１．５ｍ。撮影方向は南から。
集石遺構７（図版２－７）水糸の差し渡しは１ｍ×２ｍ。
撮影方向は南から撮影方向は写真左手を手前にして南から

集石遺構８（図版２－８）集石７の北東の集石。
集石遺構９（図版３－１）グリッドの差し渡しは２ｍ×２ｍ
集石遺構10（図版３－２）グリッドの差し渡しは１ｍ×１ｍ

全て掘り込みを持たない集石遺構で、製作過程もわからないものが多い。しかし、集石遺構３では、写真上の上半分にあたる部分で意図的に石を積んだ計画性が見られ、集石遺構６では、掘り込みはないものの、集石の中央に大振りの石を配置して石を積むなどの意図が見受けられた。集石に用いた石材は、全て尾鈴山酸性岩類で、熱を受けて赤変したものや度重なる被熱で割れたものが殆どである。

旧石器時代の礫群の検出層位は、全てＡＴ下位の黒褐色土の下面付近である。ツール等は含まず、全て尾鈴山酸性岩類で構成される。礫群に関しては、全て取り上げ、総重量を計測した。

礫群Ａ（図版３－３）礫の総重量は、乾燥重量で２３．０３ｋｇである。
礫群Ｂ（図版３－４）礫の総重量は、乾燥重量で１．９８ｋｇである。
礫群Ｃ（図版３－５・６）礫の総重量は、乾燥重量は９．５５ｋｇである。

礫群Ａは、集積状況は散漫である。礫群Ｂは、３０個程度の礫を寄せ集めているが、集積作業には計画性や規則性は認められない。礫群Ｃは、小さなまとまりを持った礫が３グループ接近した状況で検出された。この礫群にも規格性や規則性は認められない。

５．出土遺物

出土遺物のうち、石器類と認定できたのは、表のとおりである。縄文時代早期は、単純な集石遺構周辺に遺物が散見される状況で、殆どが磨石・敲石・台石・石皿である。剥片は認められるものの、刃器が全く見受けられない。当該時期の土器類も、今回の調査では全く見受けられなかった。旧石器時代では、ナイフ形石器が１点検出された。

No	器　種	石　材	縦	横	高さ	重さ	時　代
1	環状石斧（未）	尾鈴山酸性岩類	12.0	12.0	3.3	610.8	縄文時代早期
2	横長剥片	無斑晶流紋岩				5.4	不明
3	剥片	無斑晶流紋岩				16.1	縄文時代早期
4	磨石	砂岩	15.3	9.5	3.5	783.7	〃
5	ナイフ形石器	無斑晶流紋岩				37.2	旧石器時代
6	台石	砂岩	14.7	9.0	3.7	859.4	縄文時代早期

No	器　種	石　材	縦	横	高さ	重さ	時　代
7	剥片	無斑晶流紋岩				23.5	縄文時代早期
8	剥片	無斑晶流紋岩				17.4	〃
9	磨石	砂岩	11.3	5.4	3.3	321.3	〃
10	敲石	砂岩	8.3	7.3	4.0	476.2	〃
11	磨石	尾鈴山酸性岩類	14.0	11.5	5.2	1,551.8	〃
12	剥片	流紋岩				2.4	〃
13	台石	砂岩	21.9	17.4	6.3	3,600	〃
14	石皿	尾鈴山酸性岩類	25.0	12.8	9.6	5,200	〃
15	台石	尾鈴山酸性岩類	31.7	14.5	9.5	7,400	〃
16	敲石	砂岩	6.1	4.8	3.9	151.3	〃
17	台石	砂岩	16.7	12.0	5.0	1,724.3	〃
18	砥石	砂岩	6.5	5.2	1.0	60.6	〃
19	磨石（割）	砂岩				336.1	〃
20	石皿（割）	砂岩				474.1	〃
21	敲石（割）	砂岩				198.7	〃
22	小型石皿	砂岩	7.7	6.6	2.2	158.3	〃
23	台石	砂岩	15.2	9.7	1.7	340.2	〃
24	磨敲石	砂岩	11.5	8.9	5.7	672.0	〃
25	磨石	砂岩	9.5	7.6	2.0	209.9	〃
26	磨石	砂岩	7.0	5.8	3.6	233.0	〃
27	敲石（割）	砂岩	11.5			482.5	〃
28	磨敲石（割）	砂岩				142.0	〃
29	小型石皿（割）	砂岩				499.0	〃
30	石皿	尾鈴山酸性岩類	12.5	10.7	2.8	156.9	〃
31	小型石皿	砂岩	10.3	8.7	3.0	457.7	〃
32	原歴	ホルンフェルス	17.7	16.3	7.0	2,896.0	〃
33	原礫	ホルンフェルス				938.4	〃
34	残核	ホルンフェルス	9.6	5.9	3.5	228.6	〃
35	石皿	尾鈴山酸性岩類	38.0	19.5	18.0	18,900	〃
36	台石（割）	砂岩	31.0	21.0	14.5	12,400	〃

＊表中の度量衡単位は、縦・横・高がｃｍ、重量は全てグラムである。

＊欠損のあったものについては、全長等が不明なため、重量のみ記載した。

6. ま と め

今回の発掘調査は、今まで知られていなかった地蔵谷遺跡の一部分を垣間見ることができた。遺跡が営まれていた時代は、後期旧石器時代前半と縄文時代早期が中心となる。後期旧石器時代前半の礫群については、本町の後牟田遺跡をはじめ、宮崎・鹿児島両県下で大規模に行われている東九州自動車道新設に伴う埋蔵文化財発掘調査で類例が多く見られている。今のところの傾向では、１m以内のまとまりを持ち、数十個の礫を集積した礫群が多いようである。今回の調査では、旧石器時代の礫群に伴う石器類が同時代の調査面積の関係もあり、明らかとはならなかった。しかし、周辺遺跡の発掘調査成果から、当時の地蔵谷人は、比較的温暖であったと考えられる当時の環境の中で、磨石・敲石・石皿・台石を主体とした刃器を殆ど伴わない状況で、植物質主体（少なくとも、刃器を多用する必要がなかった）の食生活をしていたのではないかと思われる。

報告書抄録

ふりがな	
書名	平成16年度　県営ふるさと農道緊急整備事業切原地区 （地蔵谷遺跡）埋蔵文化財発掘調査報告書
副書名	
巻次	
シリーズ名	川南町文化財調査報告書
シリーズ番号	８
編著者名	川南町教育委員会　文化振興室　係長　島岡　武　　主事　岸本優樹
編集機関	川南町教育委員会
所在地	宮崎県児湯郡川南町大字平田２３８６－３
発行年月日	平成１７年３月２０日

所収遺跡	所在地	市町村コード	遺跡番号	調査地の位置
地蔵谷遺跡 Jizoudani	宮崎県児湯郡川南町 大字川南字地蔵谷地内	４５－４０５		北緯　32°10′11″ 東経　131°20′05″

調査期間	調査面積	調査原因	調査後の措置
040818～041031	４００㎡	県営農道整備	工事施工

図版１

調査前風景　南より

調査区出土状況　南より

図版 2

1　集石遺溝 1

2　集石遺溝 2

3　集石遺溝 3

4　集石遺溝 4

5　集石遺溝 5

6　集石遺溝 6

7　集石遺溝 7

8　集石遺溝 8

図版３

１　集石遺溝９

２　集石遺溝１０

３　礫群Ａ（西から）

４　礫群Ｂ

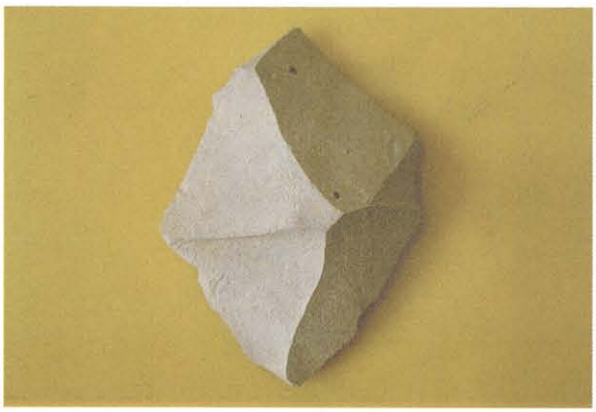
５　礫群Ｃ（東から）

６　礫群Ｃ（部分）

図版４

環状石斧？未成品（遺物No１）

環状石斧？未成品（裏面）



剥　片（No３）

磨　石（No４）

剥　片（No７）

小型石皿（No２２）

横長剥片（No２）

ナイフ形石器（No５）

平成１６年度
県営ふるさと農道緊急整備事業
切原地区（地蔵谷遺跡）
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成１７年３月２０日

編集発行　宮崎県児湯郡川南町教育委員会

宮崎県県児湯郡川南町大字平田２３８６－３

印刷　：　アックプリント